

February
2025

特定非営利活動法人
ピースデポ
<http://www.peacedepot.org/>
Email office@peacedepot.org

第31号

ピースデポ 脱軍備・平和 レポート

[特集]

米・露・中3か国の核兵器政策に新文書

バイデン政権が核兵器使用戦略を更新

—— 多国同時対峙を意識。米核戦力の拡大方針は示さず 湯浅一郎、梅林宏道

ロシア核基本原則の改訂

—— 核使用の「しきい」を下げたのではなく具体化による威嚇 梅林宏道

「中国軍事力報告書」にみる中国核戦力の現状

渡辺洋介

《ユース・ムーブメント～核兵器をなくす私たちの取り組み》第4回

被爆地の外で「平和」と出会う

—— 対話を通じた核兵器廃絶の広がり

倉本芽美

[講義録] 2024年度第4回「脱軍備・平和基礎講座」

沖縄戦を学ぶ

玉木利枝子

トピックス

- ギアボックスの破損などが要因で飛行停止くり返すオスプレイ
- 朝鮮労働党総会拡大会議—北朝鮮の情勢認識と外交・安全保障政策
- 長射程ミサイル、25年度からいよいよ配備開始
- イスラエルとハマース、ついに停戦合意

連載 全体を生きる (53)

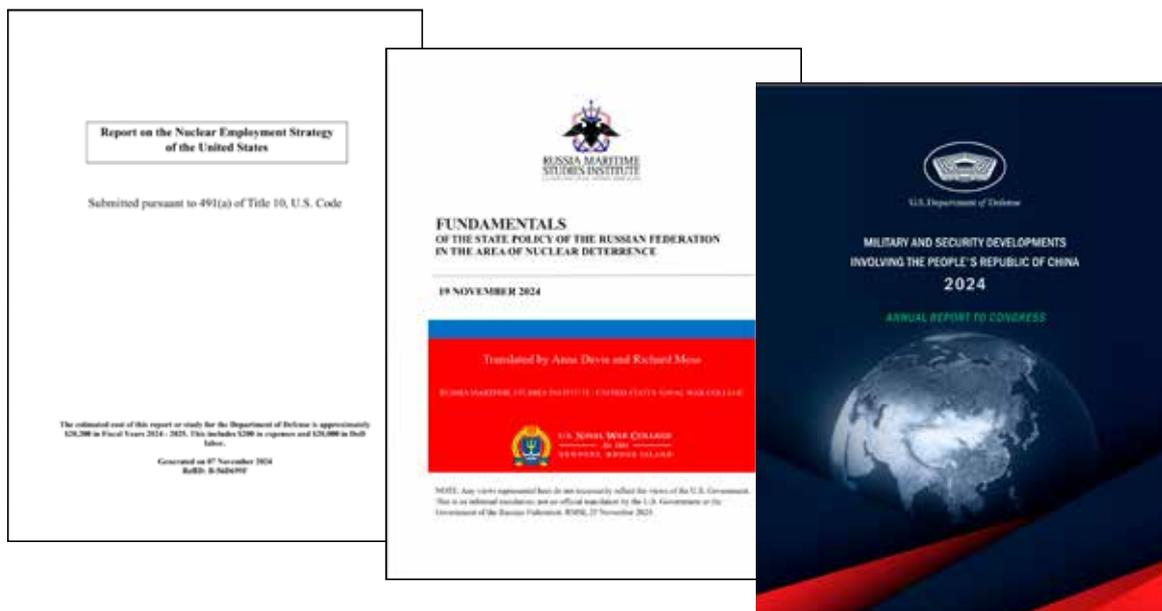
反トマ運動の始まり (2) 内と外への往復運動

梅林宏道

平和を考えるための映画ガイド

「トト」が得たもの、失ったもの——『ニュー・シネマ・パラダイス』

日誌 2024年11月16日～2025年1月15日



2024年11月から12月にかけて相次いで発表された3文書の表紙。左から、「米国の核兵器使用戦略に関する報告書」、「核抑止に関するロシア連邦国家政策の基本原則」(写真は米海軍大学の英語訳ページ)、「中華人民共和国に関する軍事・安全保障の動向」。

特集

米・露・中3か国の核兵器政策に新文書

トランプ氏が米大統領選で勝利を収めて以降、米国・ロシア・中国の核兵器政策に関する3つの文書が立て続けに発表された。米国防総省による「米国の核兵器使用戦略に関する報告書」(11月7日)、ロシア・プーチン大統領による改訂「核抑止に関するロシア連邦国家政策の基本原則」(11月19日)、そして米国防総省の「中華人民共和国に関する軍事・安全保障の動向」(12月18日)である。

「力による平和」を掲げるトランプ氏は、大統領就任直前に Gaza 停戦を実現し、ウクライナ戦争の早期終結も公約に掲げている。これらの「西方政策」は、トランプ政権の政策の中心軸である「米国第一主義」に従属するものとしてあり、第二次トランプ政権においては、米国の最大の経済的ライバルである中国封じ込めを加速して

いく可能性が大きい。この対中国デカップリングは、中露とグローバルサウスの距離を縮め、結果として西側経済の首を絞めることになりかねない。中東や東アジアにおける核問題を伴う「火種」を強引に「力」で抑え込む余裕は、今後ますます米国から失われていくであろう。

三文書から伺われることは、国際情勢の不安定化の中で大国が利権を確保し続けるために、今後ますます、核兵器への依存を高めていくということである。これはまさに第三次世界大戦への序曲であり、日本をはじめとした非核保有国は、状況の深刻さを大局的視点から把握し、人類存続のために核廃絶へのイニシアチブを打ち出していく必要がある。本特集が、そのための小さな一助となることを願う。(編集部)

バイデン政権が核兵器使用戦略を更新

—— 多国同時対峙を意識。米核戦力の拡大方針は示さず

湯浅一郎、梅林宏道

2024年11月7日、米国防総省は、冷戦終結以来4度目となる「米国の核兵器使用戦略に関する報告書」(注1)を発表した。バイデン大統領が2024年4月に作成した機密の核兵器使用指針を要約したもので連邦議会に提出された。前トランプ政権と同様(注2)、次期大統領の選出後に核兵器使用の新戦略を発表したことになる。

更新された要素

今回の改定で更新された要素は以下のような考察から生まれている。

- 核計画において潜在的敵国の保有核兵器の増大、近代化、および多様化によってもたらされる新たな抑止の課題を考慮すること。
- 米国は平時、危機、紛争のいずれにおいても、ロシア、中国、北朝鮮を同時に抑止できなければならない。
- イランが核兵器を保有しない限り、イランの地域的な侵略を抑止するために非核兵器の優位性に頼るといって2022年の核態勢見直し(以下NPR)の決定を実行する。
- 非核能力が核抑止の使命を支援できる場合は、米国の核計画に非核能力を統合すること。
- 限定的な戦略攻撃に対応するための米国の計画において、エスカレーション管理が極めて重要となること。
- 米国の拡大抑止の約束を強化するために、NATOおよびインド太平洋の同盟国およびパートナー国とのより深い協議、調整、共同計画を可能にすること。

共謀した敵への対処、中国への言及

この報告書は、「ロシア、中国、北朝鮮、イラン間の協力と共謀が拡大している」という情勢認識を述べている。そして「調整をしたうえで、あるいは機会をとらえて、ある組み合わせの敵国が侵攻する可能性」があることを指摘して、「米国の戦略家は、複雑なエスカレーションの力学についての注意深い検討や、拡大した危機や紛争における場合も含めて多数の敵国を同時に抑止することについて慎重な検討が必要である」と述べている。本誌29号の梅林の論考で紹介されたとおり、今回の核使用戦略の更新については、多くの核保有国との同時対決の問題が扱われていると騒がれてきた。報告書の上記の部分は、この〈多国対峙の核問題〉への関心を示してい

ることは確かである。そのことは、前節に述べた2つ目の項目にも書かれている。しかし、その考察を核兵器の保有量の拡大や核能力の強化につなげた議論は、報告書に登場していない。

中国の動向について報告書は、「中国は核戦力の野心的な拡大、近代化、そして多様化に取り組んできた。そして初期の核の三本柱を達成した」と述べている。「初期の核の三本柱を達成」という意味は、すでにICBM、IRBMなどのロケット戦力が強力であることは周知であるが、爆撃機などの戦略空軍力や戦略原潜の核戦力も徐々に整ってきたことを意味する言葉である。しかし、論者の中には、米国にとってロシアと中国は同等の脅威であるとの認識を述べる者もいるが、報告書はそのような認識は述べていない。これは2022年の「核態勢の見直し(NPR)」における、中国は「我々の核抑止力を評価する上で、ますます重要になっている」(注3)という記述を反映した内容であると考えてよいであろう。

これらの情勢分析から、報告書は「現在の米軍の能力、態勢、構成、または規模を適応させる必要があるかもしれない」と述べ、「指針は国防総省に調整を行う必要があるかどうかを継続的に評価するよう指示している」と述べている。この文言は、中国の増強に対応して米国の兵器を拡張するかどうかについての判断は行わず、結果的には次期トランプ政権に委ねていることになるであろう。

おわりに

軍備管理については、「米国は、ロシアが引き続き新START条約の中心的な制限を遵守していると判断できる限り、条約の有効期間中、同条約の中心的な制限を遵守する」としているが、2026年2月以降の方針は示していない。この姿勢は、米国が「米国と同盟国およびパートナーの安全を確保し、強力で信頼できる戦略的抑止力を維持しながら、新STARTで定められたレベルから配備核兵器を最大3分の1削減することを安全に追求できる」という2013年の使用戦略の結論(注4)とはかけ離れている。

また2024年6月、中国、ロシアおよび北朝鮮の脅威増大を抑止するため、米国は核戦力の拡大に向けた準備が必要だと政府当局者が明らかにした(注5)ことで、バイデン政権は、トランプ政権が配備兵器を増やすための舞台を事実上整えたといえる。全体としてみると

2024年指針は、核戦略と軍事力構造に関する進行中の議論に影響を与えようとするよりも、これらの問題を次期トランプ政権に委ねていることになる(注6)。

注1 <https://media.defense.gov/2024/Nov/15/2003584623/1/-1/1/REPORT-ON-THE-NUCLEAR-EMPLOYMENT-STRATEGY-OF-THE-UNITED-STATES.PDF>

注2 https://www.esd.whs.mil/Portals/54/Documents/FOID/Reading%20Room/NCB/21-F-0591_2020_Report_of_the_Nuclear_Employment_Strategy_of_the_United_States.pdf

注3 <https://media.defense.gov/2022/Oct/27/2003103845/-1/-1/1/2022-NATIONAL-DEFENSE-STRATEGY-NPR-MDR.pdf>

注4 https://uploads.fas.org/2013/06/NukeEmploymentGuidance_DODbrief061213.pdf

注5 <https://www.armscontrol.org/2024AnnualMeeting/Pranay-Vaddi-remarks>

注6 アダム・マウント、ハンス・クリステンセン：「バイデンの核兵器使用指針は核兵器の決定をトランプにゆだねている」、FASブログ、2024年12月5日。

<https://fas.org/publication/biden-nuclear-weapons-employment-guidance-leaves-nuclear-decisions-to-trump/>

ロシア核基本原則の改訂

——核使用の「しきい」を下げたのではなく具体化による威嚇

梅林宏道

2024年11月19日、ロシアはその核兵器政策の基本となる文書「核抑止に関するロシア連邦国家政策の基本原則」を改訂した。旧基本原則は2020年6月2日に出されたものであるから4年ぶりの改訂となる。改訂は突然に発表されたのではなく、9月25日にプーチン大統領が改訂の意図と考え方を前もって予告していたものである。以下では、2020年版を旧版、2024年版を新版と呼ぶ。

2つの版の間に文書の基本構造に変化はない。I. 一般条項、II. 核抑止の本質、III. ロシア連邦が核兵器使用へと移行するための条件、IV. 核抑止に関する国家政策を履行する連邦政府当局、政府機関および政府組織の任務と機能、という4章で構成されている。

改訂の内容

まず、主要な改訂内容を説明しよう。

●ロシアの核政策文書には「核抑止の行使」という概念が登場する。「核兵器の使用」とは異なる概念であり、やがて核兵器の使用がありうるとして、明示的に核抑止態勢をとることを「核抑止の行使」と呼んでいる。

その「核抑止の行使」の対象について、旧版は極めて大雑把に記述していた。「ロシア連邦及び／またはその同盟国に対する侵略があったとき、(核)報復が不可避であるという懸念を敵国に与える」(第9節)のが核抑止であると述べるに留まっていた。つまり、旧文書では、侵略国すべてが「核抑止の行使」の対象であると述べた。

それに対して、新版は、3節を費やして「核抑止の行使」の対象を記述した。

- ①ロシアを仮想敵国と想定して核兵器や他の大量破壊兵器を保有している国や軍事同盟、また、侵略や侵略の準備のために領域や資源を提供している国。
- ②軍事同盟に属している、いかなる国の侵略も軍事同盟

全体の侵略とみなす。

- ③ロシア連邦やその同盟国への非核保有国による侵略であっても、核兵器国の参加や支援があれば共同の侵略とみなす。

●旧版では、「核抑止の行使」を考えなければならない軍事的脅威として、以下の①～⑥のケースを挙げていた。

- ①仮想敵による、ロシアやその同盟国の隣接地や海域への核兵器、その運搬手段、それらのためのインフラなどの蓄積。
- ②仮想敵による、ロシアに対して使用可能なミサイル防衛、中距離・短距離の弾道ミサイルや巡航ミサイル、非核・極超音速の高精度兵器、無人戦闘車、指向性エネルギー兵器の保有や配備。
- ③仮想敵による、ミサイル防衛、対衛星戦争用兵器、宇宙配備の攻撃兵器の開発や配備。
- ④仮想敵による、ロシアやその同盟国に対して使用可能な核兵器や他の大量破壊兵器、それらの運搬手段の保有。
- ⑤大量破壊兵器、その運搬手段、その製造技術・設備の無制御な拡散。
- ⑥非核国家への核兵器やその運搬手段の配備。
これに対して、新版では次の(1)～(4)が追加された。
- (1) 軍事インフラがロシア国境へと進出するような、新しい軍事同盟の設立や既存の軍事同盟の拡大。
- (2) 輸送の生命線の封鎖などによる、ロシア領土の一部の孤立を狙った仮想敵の行動。
- (3) ロシアの技術インフラ、生態系、社会の大惨事を引き起こす可能性のある危険施設の破壊を狙った仮想敵の行動。
- (4) ロシア国境近くにおける仮想的による大規模軍事演習の計画や実施。

●旧版も新版も「核抑止の原則」として7項目を挙げ

ている。しかし、旧版の第1項目であった「国際的な軍備管理における誓約の遵守」という原則が削除され、「ロシア領土外に置かれた核兵器も含めた核兵器の使用に関する指揮の中央集権化」という新原則が加わった。

●核兵器が抑止ではなく実際の使用に至る条件について述べた第II章に関しては、詳しく比較することにする。

a) 「ロシア連邦及び／または同盟国の領土を攻撃する弾道ミサイルの発射についての信頼できるデータの受領」。新旧に変化はない。

b) 「ロシア連邦及び／または同盟国、あるいはロシア連邦領土外にあるロシア軍やその施設、に対する敵の核兵器あるいは他の大量破壊兵器の使用」。下線部分が新版で追加された。

c) 「核戦力による反撃行動を損なうような、ロシア連邦政府や軍の重要サイトに対する敵の攻撃」。新旧に変化はない。

d) 「通常兵器の使用による、ロシア連邦及び／あるいは連合国家の一員であるベラルーシへの侵攻において、両国の主権と領土保全への致命的な脅威となる場合」。新版において、下線のようにベラルーシの国名が明示的に追加された。

e) 「空中及び宇宙からの攻撃兵器の大量発射（発進）（戦略・戦術航空機、巡航ミサイル、無人航空機、極超音速その他の飛行体）、及びそれらのロシア国境通過についての信頼できるデータの受領」。これは旧版にはなく新版で追加された条件である。

考察

まず、核抑止に関する基本原則と言いながら、極めて細部の変更が加えられているということに注目したい。考え方の変更というよりも2022年2月のウクライナ侵攻以後に生じた国際情勢の変化を反映した内容の改訂になっている。

たとえば、フィンランドやスウェーデンのNATO加盟を受け、あるいは将来におけるウクライナやジョージアのNATO加盟を想定して、「核抑止の行使」の対象に「(1) 軍事インフラがロシア国境へと進出するような既存の軍事同盟の拡大」が追加された。また、ベラルーシにロシアの核兵器が配備されたことを反映して、「ロシア領土外に置かれた核兵器」も指揮権はロシアにあることを「核抑止の原則」に追加した。(因みに「国際的な軍備管理における誓約の遵守」が原則から削除されたことには深刻な意味はないであろう。基本原則文書の「一般条項」の個所に、国際条約が基礎にあることが述べられている。)

改訂されたこの「基本原則」文書は、ドクトリンというよりも対外的なメッセージ文書という印象すら与える。情報戦争の一つと言ってもよい。実際、以前には核兵器使用の対象にならなかったケースが今回の改訂によって初めて使用の対象になるケースはほとんどないと言ってよいであろう。唯一、III章のe) がドローン時代を反映して追加されているが、これとともd)の一部として対応できる。その意味で、「改訂によって核兵器使用のしきいを下げた」という評価は当たらない。

今回の改訂によって、核兵器国と同盟関係にあったり、核兵器国の支援を受けたりした非核兵器国によるロシアに対する攻撃に対して、核兵器を使うことがありうるというロシアの考え方が明示的に述べられたわけであるが、そのような考え方は、1995年の安保理におけるロシアの声明(S/1995/261)においてすでに表明されてきたことであり、今回の改訂で登場した新局面ではない。

ロシアは、今回の基本原則文書の改訂によって、核兵器使用の可能性をより具体的に示し、NATO加盟国に対して警告、あるいは威嚇したと考えられる。

「中国軍事力報告書」にみる中国核戦力の現状

渡辺洋介

2024年12月18日、米国防総省は2024年版「中華人民共和国に関する軍事・安全保障の動向」(通称「中国軍事力報告書」)を公表した(注1)。これはあくまで米国の視点から書かれた報告書であり、十分な検証が必要な文書ではあるが、中国の軍事力に関する情報が非常に限られている中で、それを知るための重要な情報源の1つといえる。以下では、同報告書の核戦力の部分を批判的に紹介する。

中国の核兵器保有数

報告書(2024年版)の推定によると、中国は2024年現在、600発以上の運用可能な核弾頭を保有している。同報告書(2020年版)は、2019年の中国の核兵器保有数を200発強と見積もっており、これらの推定値が正しければ、中国はわずか5年間で核弾頭を約400発増加させたこととなる。にもかかわらず、現在の中国の核弾頭保有数は米国やロシアに遠く及ばない。2024年

6月現在で米国は約3700発、ロシアは約4500発の現役核弾頭(退役・解体待ち核弾頭を除いた核弾頭)を保有しているとみられる(注2)。

報告書(2024年版)は、今後の中国の核保有数の見通しについて、2030年までに1,000発以上の運用可能な核弾頭を保有するだろうという2023年版の予測を維持した。また、2022年版では、2035年には約1500発の核弾頭を保有すると予測していた。こうした予測に対し、米国科学者連盟(FAS)のハンス・クリステンセンらは、これまで米政府機関が過大な予測を何度もしてきた前歴を示し、こうした予測は割り引いて捉えるべきと批判している(注3)。

サイロ建設の進捗状況

2021年ごろから中国北部の砂漠地帯では、約320基の大陸間弾道ミサイル(ICBM)サイロとみられる施設の建設が進められている。2024年版報告書は、人民解放軍はすでに同サイロへのICBM(東風5型、東風31型)の配備を開始したと報告した。なお、これとは別に中国東部の山岳地帯においても合計30基ほどのサイロが新たに建設されている。一方で、クリステンセンらは、中国北部の3か所のサイロ施設については、完全な稼働まであと数年はかかるだろうと予測している(注4)。

プルトニウムの生産拡大?

報告書は、中国は1990年代初頭以降、核兵器の原料であるプルトニウムを大量に生産しておらず、中国が核兵器保有数を増やすのであれば、今後数年以内に新たにプルトニウムを生産する必要があるとの見解を示している。中国は福建省霞浦県にナトリウム冷却プール型高速炉(CFR-600)1基の建設を完了し、もう1基の建設を進めている。報告書は、中国はこれらの施設が平和目的のためであると公言してはいるものの、将来、新しい高速増殖炉や再処理施設を利用して、核兵器用プルトニウムを生産する可能性が高いと述べている。

中国の核兵器先行不使用政策

中国は核実験に成功した1964年以来、核兵器の「先行不使用」を宣言しており、現在もこの政策を維持している。すなわち、中国はいかなる時も、いかなる状況においても、決して先に核兵器を使用せず、また、いかなる非核兵器国や非核兵器地帯に対しても無条件で核兵器の使用あるいは使用の威嚇を行わないと公言している。これに対して、報告書は疑いの目を向けている。報告書は、中国の核戦力や指揮統制の存続可能性を脅かすような非核攻撃を受けた場合、また、台湾での通常兵力による敗北が中国共産党政権の存続を脅かす場合、核の先行使用が考慮されるかもしれないとの見解を示している。しかし、中国が先行不使用政策から逸脱したことを示す

確たる証拠は存在しない(注5)。

核戦力増強の背景

報告書は、中国人民解放軍の近代化を2035年までに「基本的に完了」させるという中国共産党の目標に向けて、さらに習近平主席が掲げた2049年までに「世界一流」の人民解放軍を実現するという目標に向けて、中国の核戦力は引き続き増強されるだろうと予測する。なぜなら、米中間の長期的な戦略的競争が続く中で、中国が競争力のあるグローバルな大国となるためには、強力な核戦力が必要であると認識しているからだと報告書は述べる。

現状では、中国の核兵器保有数(約600発)は、米国の保有数(約3700発、現役核弾頭数)と比べて圧倒的に少ない。さらに、中国との国境紛争を抱えるインドも核弾頭の数を増やしている。こうした要素も中国が核兵器を増やそうとする要因となっている可能性がある。

おわりに

報告書は、米国防総省が集めた資料に基づいて米国の視点から中国の軍事力を分析したものである。情報収集には限界があるうえ、展開される議論は米国の利益と分かち難く結びついており、正確性、客観性の双方において不完全なものだ。例えば、報告書は中国の核兵器保有数を600発としているが、これは中国政府が保有数について何も公表していない中での推定値である。それなりの根拠はあるであろうが、鵜呑みにすべきではない。また、報告書は中国の核兵器先行不使用政策に疑いの目を向けているが、これは米国の懸念に基づいた一方的な議論という印象を拭えない。実際には、中国は米ロ英仏に対して先行不使用条約締結に向けた交渉を開始するよう、2024年のジュネーブ軍縮会議で呼びかけている。報告書は中国の急速な核兵器増強を強調しているが、その原因の1つが米国の核兵器近代化にあることには目をつむっている。この視点の欠落は、この報告書が米国のために作られたものにすぎず、客観性に限界があることを端的に示している。

注1 「中華人民共和国に関する軍事・安全保障の動向」(2024年12月18日)

<https://media.defense.gov/2024/Dec/18/2003615520/-1/-1/0/MILITARY-AND-SECURITY-DEVELOPMENTS-INVOLVING-THE-PEOPLES-REPUBLIC-OF-CHINA-2024.PDF>

注2 「ピース・アルマナック2024」112頁

注3 Hans Kristensen et al. "Chinese Nuclear Weapons, 2024" <https://thebulletin.org/premium/2024-01/chinese-nuclear-weapons-2024/>

注4 注3と同じ

注5 注3と同じ

《ユース・ムーブメント～核兵器をなくす私たちの取り組み》第4回

だれであっても、どこにいても、核兵器をなくそうと声をあげられる社会へ。核兵器廃絶を求める声をあげることを、被爆地だけに背負わせてはいないでしょうか。多様な実践を通して、同世代に問題意識を広げようと摸索するユースと出会っていただけたらと思います。(コーディネーター・徳田悠希)

被爆地の外で「平和」と出会う —対話を通じた核兵器廃絶の広がり

倉本芽美 (KNOW NUKES TOKYO 共同代表)

私は3年前に大学進学を機に京都に移り、立命館大学国際平和ミュージアム学生スタッフとしてミュージアム運営の活動をしなが、KNOW NUKES TOKYO (KNT) 共同代表などとして、首都圏の仲間と繋がりながら SNS 発信やイベント企画等の核兵器をなくすための活動に取り組んでいます。

私が京都と首都圏、それぞれと繋がりながら活動することを意識するようになったのは、2023年4月にKNTが開催したKNOW NUKES FORUMで「東京では活動する仲間を見つけやすい。では地方は？」という参加者の声を目にしたことがきっかけです。当時私は、自分が東京ではなく京都にいることに宿題を課せられたように感じました。そこから京都だからこそできる平和活動・核兵器廃絶活動を行い、京都で核兵器の問題に関心を持った人のその関心を活かしていける活動をしていきたいと思うようになりました。

2023年9月には、立命館大学国際平和ミュージアムがリニューアルオープンし、私はここで学生スタッフとして来館者への展示ガイドを行うようになりました。このミュージアムでは、日本がアジア各地を植民地支配した過去の歴史から始まり、来館者が現代の平和創造の主体者として生きる方向性を導く展示がされています。今回のリニューアルによって日本の戦争加害に関する展示を増加させた分、広島・長崎の原爆投下に関する展示は以前よりも縮小しました。このミュージアムで原爆に関する事実をすべて理解するのは難しいかもしれません。だからこそ私は、展示品の一つである、長崎原爆によって変形した燭台を前に、来館者と対話をしています。「燭台を変形させるほどの熱線や爆風を浴びた人たちはどんな影響を受けたと思いますか?」「どうして今も核兵器があるのでしょうか?」こうした質問を投げかけながら来館者と対話をし、声なき展示物が伝えようとしているメッセージを来館者に伝えるファシリテーター的ガイドを行っています。

戦後80年という節目を迎え、戦争の経験を直接語れる人が少なくなっている現実が改めて突き付けられています。すでに訪れている戦争経験者/被爆者なき時代に、先人たちが残した声や遺品から自らの想像力を働かせ、

彼ら/彼女らが伝えようとしたメッセージは何なのかを考え、自分の言葉で理解することが、戦後に生まれた私たちのできる「継承」の一つだと思います。

また、昨夏、KNTは「AFTER 1945 - 被爆者の被爆体験以外の物語」と題した、被爆者とのトークイベントを国際平和ミュージアムで開催しました。お友達に出会うように被爆者と出会い、被爆者の生きている声を感じ取ってもらいたい。被爆者の1945年以後のお話を聞きながら、イベント参加者自身が被爆者との間に共通点を見出してもらいたいという狙いのもと、開催しました。このイベント後、「核兵器をなくすために自分も何かしたい」と声をかけてくれる京都の同世代の人達と出会うことが増えました。日々、地道な活動ではありますが、こうして目に見える形で輪の広がりを少しずつ感じることができています。

被爆地の外で核兵器の話をするための切り口を見つけることは容易なことではないかもしれませんが。それでも多くの人が希求する「平和」のために何ができるのかという課題を共有しながら、「平和」のために核兵器は必要なのだろうか、どうして核兵器は無くならないのだろうかなどの問いを立て、目の前の一人ひとりとの丁寧な対話が、核兵器をなくすための鍵になってくると思います。考え方が違うように思える相手とでも、相手と自分との共通項を見出し、その共通項を軸に対話することを諦めず続けていきたいと考えています。



国際平和ミュージアムでのイベント終了後、被爆者の方を囲んで。

[講義録] 2024年度第4回「脱軍備・平和基礎講座」

沖縄戦を学ぶ



玉木利枝子（沖縄戦体験者）

本稿は、8月24日に行われた2024年度第4回「脱軍備・平和基礎講座」の記録をもとに編集部が抄録を作成し、講演者である玉木利枝子さんおよび沖縄タイムス記者の塩入雄一郎さんの校正を得たものです。玉木さんは、10年ほど前から県のボランティアガイドとして県内外の人へ向けた講話を行っておられます。講座では、80年前のつらい、壮絶な経験の記憶を大変丁寧に語っていただきました。あらためて感謝申し上げます。なお、角括弧 □ は編集部による補足です。（編集部）

「10・10空襲」の記憶と逃避行の始まり

ご紹介をいただきました玉木と申します。この戦争を最初に意識したのは私が小学校4年生、10歳のときのことでした。今で言えば、9歳かもしれません。戦争〔編注：アジア・太平洋戦争〕が始まった1年生のときはまだ幼く、あまり戦争のことを意識することはありませんでした。

ところが4年生のときの〔1944年〕10月10日に沖縄県の中核である那覇という町が敵の爆撃によって大空襲を受けました。それまでは、戦争が始まって教科書が変わったことや、色々な訓練があったこと、防空壕を掘ったことがあっても意識しない状態でしたが、実際に砲弾が投下され、街が火の海となって、戦争を意識することになりました。

10月10日の那覇の大空襲というのは歴史に残っているわけですが、父の開業する病院も焼け、那覇に住めなくなりました。そして宜野湾村にいた父の従兄の校長を頼って避難をしました。そこでの避難生活は、私には楽しかったという記憶しかありません。

正月が過ぎて間もなく、避難中である当時の宜野湾村から父が軍医として招集されました。それが私たちの家族の悲劇の始まりだったのかも知れません。その頃ちょうど父と叔父が入隊しました。我が家には、おじいちゃんと旧制中学2年の兄以外に頼りになる男性がいなくなりました。当時の旧制中学というのは沖縄では最高学府で、非常に優秀な子しか行けませんでした。今、高校は80校ぐらいあるのですが、当時は中学が10校ぐらいしかありません。だから競って入る子は非常に優秀な子です。でもその頃からは中学生が何をさせられていたかという、もう勉強どころではありませんでした。軍隊の為の奉仕作業でした。防空壕を掘る、飛行場を作る、戦車が通れるような道路作りをする。そのような作業に

駆り出されたのは14～17歳ぐらいの中学生です。兄は奉仕作業に開けてくれていました。

避難先の我が家に兄が帰ってきた日が4月1日です。4月1日は沖縄本島に敵が上陸した日です。軍艦1,500艘がこの島を取り囲んで、砲弾を打ち込みました。これが艦砲射撃です。こういうことを表現して多分、鉄の暴風と言うのでしょうか。上陸前にどんどん砲弾を打ち込んで、うんと弱ったところで上陸する。それが当時の米軍の常套手段でした。この艦砲射撃や、投下爆弾、榴散弾、焼夷弾など、とにかく放り込んで抵抗する力のない状態を作ってから敵は上陸しています。それが4月1日です。

実際には3月26日に私が住んでいる那覇市の海岸から見える近くの離島〔編注：慶良間諸島〕にすでに敵が上陸していました。でもそのことを日本の軍隊は大本営が全部押さえて秘密にしていました。

ついに4月1日の本島への上陸ということになり、日本の軍人から南は激戦地になるから北の山の中に逃げろと指示をされました。那覇市というのは沖縄の南の端っこです。北に逃げろと言われたのですが、私たちがその時に決めたのは、出征した父の下へ行こうということでした。このような状況でみんな死ぬかもしれないけれども、死ぬ時には父のそばでありたい、家族が全部まとまって一緒に死ぬんだという思いが強くありました。特に祖父の考えだったのですが、家族みんなもそういう気持ちでした。そして避難をしている宜野湾村から、軍の司令部があるらしいという話だけを頼りに首里の城下町を目指して行きました。

首里というのは王城というお城のある城下町です。城下町ですから、のどかな佇まいのいい街並みなのですが、私たちが行った時にはもう城下町は壊滅している状態で、家が一軒もありません。高木たかぎと呼ばれる沖縄独特

の大木がひとひらも葉を残していません。この白く丸いポツポツした穴は、大型の砲弾が落ちて穴が開き泥水が溜まっている様子です。細長く白く見えているのがお城の池、龍潭です。この龍潭の上の丘の上にはお城があるはずなのですが、ご覧の通り跡形もありませんでした。どこに何があったかさえわからないという状況の城下町首里へ着いたのです。

ガマでの避難生活と南部への逃避行

これほどの砲弾の中で父を尋ね歩くことだけでは許されません。この城下町首里で沖縄でガマと呼ばれる岩の洞穴がたくさんあります。城下町にもありました。それを見つけて入ることができました。もう何百名の人が入ってるようなところへ入ったのですが、どのぐらいの人数かは定かではありません。深刻なのは大人で黙りこくっている。聞こえるのは子供の泣き声とそれからもろに聞こえる外の砲弾の音。

このような避難生活を何日ぐらいこの壕で過ごしたのか、子供の私はこの日付の感覚が全く残っていません。今日が何月何日かを知ることがありませんでした。でも自分の目の前で起こったこと、自分の身边で起こったこと、これははっきり鮮やかに未だに覚えています。それで何日目かのある日、おそらく5、6名の拳銃を担ぎ鉄兜をかぶっている日本の軍人が入ってきました。「この壕は軍隊が使用する、住民は日暮れと共にこの壕から出るように」という指示命令でした。軍隊の命令に対して、この何百名もの人の中からいやいやこは私たちの隠れ場です、この壕を軍隊に渡しません、などという反論者は全く出ません。そういうことの言える時代ではありませんでした。軍が命令している、出なければならぬ、これが当たり前でした。

軍隊は今すぐ出るとは言わず、日が暮れたら出るようにということでした。というのも、艦砲射撃、投下爆弾、焼夷弾、照明弾、いろんな砲弾に加えて、夜明けと共にグラマンという小型の戦闘機が航空母艦から飛んでくるのです。1機や2機ではなく編隊を組んで縦横無尽に飛んでくる。これが機銃弾を打ち込んできます。機銃弾の

砲弾の中、逃げ回りながら日本の軍人を捕まえて司令本部はどこですか、野戦病院はどこにありますか、と家族は尋ね歩きました。すると日本の軍人からお前らは軍隊のことを根掘り葉掘り聞くがスパイではないのか、と結局スパイ呼ばわりをされて父を探すことの困難さを思い知っただけでした。

1個1個というのは小指ほどの小さな銃弾ですが、数がすごいのです。飛行機は屋根すれすれに低空飛行してお互いに顔が見えるほどです。ですから百発百中当たります。この写真で地面に白く小さくポツポツ穴が空いています。これはその機銃弾が打たれて穴が開き泥水が溜まっている様です。これほどの間隔、これほどの数で打たればそれは猫の子も生きることはないであろうと思えるほど打ち込みます。ですから軍隊も今すぐ出ろとは言いません。日暮れとともにこのグラマンが母艦に帰ります。富める国アメリカは戦争も職業なのですね。お仕事終わりという感覚だったのではないのでしょうか。

日が暮れると、激戦地である南部に向かいました。南に行くというのは死に行くということです。北の山の中に逃げるようにと軍人は指示をしました。それでも私たち家族は死ぬ覚悟ができており、死際に父と一緒にでありたい、父のそばにいたいというみんなの強い思いで、軍人の指示に逆らって南に向かいました。北へ向かった人たちが無事に敵陣を突破して北の山の中に逃げるのができたかどうかは分かりません。

その時は時期的に梅雨時でした。子供心に残っているのは、毎日びしょびしょに濡れて歩いたということです。目的地があって歩いているのではありませんでした。とにかくどこでもいいから南に向かいながら隠れ場、壕、ガマを探して彷徨続けました。そこに元々住んでる人たちのガマ、壕、そして大きなガマは軍隊優先。掘った地下壕は掘った人たちのもの、よそから上がり込んだ避難人の私たちは壕に入ることができない。だからどンドン目の前でも砲弾に倒れていく人をその頃から見るように



なりました。何日間も濡れて冬でもないのに寒かったという記憶があります。

何日目かのある日、祖父と兄がひとつの壕を見つけました。その壕はコの字形の丘に内側から地下壕が掘ってあるものでした。その小さな壕に入ることを許してもらいました。どこへ行っても入れないというのは、壕の持ち主が先に入っていて入れてもらえないのではありません。人がいっぱい入れない状況だったのです。小さな壕にやっと入れてもらえて、子供心にも安堵した記憶があります。

そこでも何日ぐらい平穏というか、直撃弾を受けない安全圏にいたのか、日付の記憶がありません。いつも昼間は壕の奥で外の砲弾の音を聞いて、日暮れるとグラマンが消え、大人は食料調達に出ました。その頃からはもう手持ちの食料というのは全くありません。どこかで何かを探さなければ食べることができません。私の家族で

兄の死、見捨てられた人びと

避難生活をどのくらい過ごしていたか。先ほどから言っているように日数の感覚が残っていないのですが、いつものように外に出ていました。子供の私たちは飛び回る。年寄り汗を拭く。そんな中で一発の砲弾が破裂しました。そして身を守るために伏せて、4本の指で目を押さえ、耳を保護するという訓練をしてきたにも関わらず、それができませんでした。あまりに咄嗟のことで両手で顔を押さえて硬直していました。固まって立っているだけ。沈む気配が分かります。恐る恐る辺りを見回すと、怪我をして倒れ込んで、もがいて起き上がろうとしている人、我先に防空壕へ飛び込む人。大パニックの中で固まっている私の目の前を通り過ぎたのが兄でした。ところがどうも胸の辺りが真っ赤に染まっているのです。やっと我に帰り兄の後を追って防空壕へ駆け込みました。兄はと言うと、破片で肩先からばっさりやられていました。腕は身体についていますが、ついてるだけで、血染めになった腕を別の手で抱えていました。その時の私は泣いていたのかどうかも全く記憶にありませ

は、出征した叔父嫁の叔母が食料の調達係になってくれました。どこで探し、どこで煮てくるやら分かりませんが、ちっぽけな芋などです。軍民争って食料を探してるわけですから、畑で本来の芋は掘り尽くされています。髭がちょっと太くなって芋の形になったような芋を拾って煮て持ち帰ってきました。これが家族の1日の一食であったと記憶しています。

壕に残っているのは、私たち子供や年寄りです。壕の中は劣悪です。湿度が高く、天井から壁から湿気がにじみ出ています。壁といっても板が張ってあるわけではありません。土肌が剥き出しだから、いつもじめじめして空気が悪いのです。せめてこのグラマンの飛んでいないわずかな時間だけ、劣悪な壕の中から外へ出て新鮮な空気が吸いたいと、女も子供も1歩外へ出ます。遠くへ行けません。1歩だけ。爆撃が近いのを知ればすぐに防空壕に飛び込めるように本当に一歩だけ出る。

ん。見えているのは兄だけでした。

その頃までは日本の野戦病院も担架を出すという力があつたのでしょうか。兄たちが人がみんな近くの野戦病院に運ばれました。祖父とともに兄について野戦病院に行きました。兄の腕が身体から切り離されるところを私が見ておりません。真っ赤に血で染まった包帯を腕のない体にぐるぐる巻きにされ、ベッドとは言えない板の棚に運ばれてきました。水が欲しい水が欲しいとうめきながらついに兄は息を引き取りました。水を飲ませてやれなかった。いまだに悔やまれることです。兄が亡くなり祖父と私は自分の防空壕へ戻りました。

戻った翌日だったと思います。野戦病院から連絡が来ました。その丘の近くのたくさんの防空壕が敵の火炎放射でやられた、もうここにはおれないので、野戦病院は移動します、皆さんもどこかへ逃げてください、という連絡なのです。やっと入れてもらえた防空壕があるのだからここにいる、とは言えません。火炎放射というのは艦砲射撃のように軍艦から打ち込んでくるわけでもな



米軍の火炎放射器



ひめゆり学徒隊

く、グラマンのように機銃掃射で打ち込む銃弾のようでもなく、上空から落とす爆弾でもありません。戦車に砲筒を取り付けて放射する。砲弾が打ち込まれるのではなくて火を噴く兵器なのです。燃えるものは何でも焼きつくすという恐ろしいものです。程なく焼かれることを承知でそこに残ることはできません。けれどもこれから先、防空壕があるかどうかも分からない。それでもとにかくそこからは出なければいけませんでした。

日暮れを待って私たちは出る決心をしました。当時の野戦病院の移動というのも悲惨です。ご存知のように女学生が看護活動をしていました。14、5歳の女学生が、屈強な怪我をした軍人を背負って逃げるということはできません。幼い少女たちは一緒に歩ける人はどうぞ歩いてください、歩けない人はそのままどうぞ寝ていてくださいと言います。その時おむすびが1個あればよし、それがなくても必ず一服の薬、1杯のミルクを置いていきました。大人がひそひそ話をしていました、ひそひそしなくても子供の私たちは知っていました。あれ死ぬための薬だよ、あのミルクだってそうだよ、と。

そのように悲惨な移動風景を横目に見ながら、日暮れて私たちも外へ出ました。外がどのような状況になっているかは知っていました。砲弾で穴が開いている。木々は燃えつきている。破片が転がっている。死体が転がっている。死体は一体一体転がっているではありません。死体が転がっている中に、こんもりと折り重なっている死体があります。子供ですからあの時なぜあのように死体が折り重なっているのか、とくに考えることはなかったと思います。でも今思えば、あれは家族、グループなのです。

今までお話してきたような艦砲射撃や爆弾、火炎放射などに加えて、敵が、あそこに何か怪しい動きがある、あそこに何か設備がある、あれは日本軍のトーチカか、あれは日本の軍人か、というように何かを察知した

祖父母の死と戦場の現実

私たちは、もうその頃からは南部にいることは知っているけれども、何という村、何という地域に自分がいるのかさえ分かっていませんでした。毎日、夜は、隠れ場探し、壕探しで歩き回っていましたが、どこもいっぱいでした。目の前で人が死んでいきます。もうその繰り返しで自分の立ち位置さえ分かっていないのです。

戦後になってから、多分あそこは喜屋武と摩文仁という地域の真ん中ぐらいたったと思うのですが、その集落で小さな小屋を見つけました。たくさんの人が何でもいから物影に隠れようとしていました。争って私たちも入ることができました。ところがその日の夜明けに集中砲弾に見舞われて、ボロボロの毛布を気休めにかぶっていたのを剥ぎとって見ると祖父は背中から脇腹にかけてぱったりやられていました。怪我の程度が分からないは

時、一斉に砲弾を浴びせかけてきます。一斉射撃とか一斉集中攻撃とか私たちは言うてました。その時には1歩も動けません。身動きどころか息もつけません。だから息を詰めて小さく小さく縮こまります。家族は肩を抱き合って、できるだけ小さく縮こまります。とにかくやむのを待つ以外どうすることもできません。その間にその肩を抱き合った家族の上にこの直撃弾が通れば肩を抱き合ったまま家族が死体になります。これが今思えば私が見たあの折り重なった死体なのです。

そのようにして本当に目の前でどんどん人が倒れていくにも関わらず、隠れ込む壕を探して入り込むことができないという状態でした。その頃には日本の軍隊はもはや部隊というかたちをなしていませんでした。[ひめゆり学徒隊等に出された]解散命令という言葉は私たちが知りませんでした。解散命令が出てるとか出てないとかそういうことがあることさえ知りませんでした。戦後、解散命令という言葉は聞くわけです。軍人も軍属もみんな逃げ回って民間人と同じです。怪我をした軍人が銃を杖にして歩いていました。

民間人で気のふれた人はあまり目にしません、軍人は本当に怖いのです。日本の軍人は本土から武器も、砲弾も、食料も来ない。それで一発撃てば千発返ってくるというあの富める国と戦っている。安全圏にいる指導者たちの命令に従って無我夢中で飛び込んでいったあの日本軍ほど悲惨な状態はなかったと私は思っています。軍人と名が付けば怖いものはないというわけではありません。老年兵もいれば、二十歳前後の少年兵がいる。幼い中学生が鉄血勤皇隊として軍人と共に戦っている。戦いながらどれほどお父さんお母さんと叫んだことか今思えば本当に悲しいことばかりです。このような幼い少年たちが家を出る時、お父さんお母さん孝行もせず先立つことをお許しくださいという遺書を残した。こんな悲しいことがまた再び起こっていいと思いますか。

ど血が溢れかえってしまいました。ところが祖父は子供たちをどかせって叔母に言っているのです。私が10歳、叔母の子供が5歳と3歳。壊れた石垣の影に移され近いから声は聞こえるが見えない。今まで苦しんで死んでいく人たちを見て自分は一気に死にたい、一気に死なせてくれ、中途半端に怪我をしたくないとずっと祈っていましたが、その時だけはおじいちゃんをなんとかしてくれともう必死だったと思います。でもその時、私が聞いた祖父の声というのはとても人間の声とは思えない断末魔の声でした。壕探しで彷徨い続ける家族の足手まといになるまいと、あの血の海の中で祖父は自決をしたのだと叔母に後で聞きました。自決というのは非人間的な最も辛い決心のいる死に方だと思えます。息子は医者、外科医です。医者である息子の手当ても受けられずに戦場で

自決をしなければならぬ、これが戦場です。

戦争と一口に言いますが、私たちが今まで思っていた戦争は軍人同士がどこか遠いところでドンパチするというものでした。でも戦場では、自分の身辺に砲弾が落ちます。5分先、10分先の自分の命の保証がありません。これが戦場です。戦場では人間の頑張りや努力が全く通用しません。問答無用の世界です。

戦場で10歳の子供が死の覚悟をしている、痛い辛い辛い辛い思いをせずに一気に死なせてくれと祈っている。10歳の子供が神に祈るが、助けを求めることができなかつた戦場というものを分かっていたいただきたいです。

私たちはどこをどう歩いてるか、もうその頃から全く分かりませんでした。多分この摩文仁が丘という最後の地の近くだったと思うのです。アダンの木がまだ2、3本残っていてそこへ隠れこみました。そこでもすごい轟音の砲弾に見舞われた。いつもの習慣で静まる気配は分かりません。静まったら、すぐに家族の名前を呼び合う。無事の確認です。ところが、おばあちゃんの返事がない。背中、足、頭を確認しても怪我をしてない、一滴の血も流してないのに祖母は亡くなっていました。亡くなった祖母を見たとき、まず思ったことは、羨ましい、私がずっと神様をお願いをしている通りの死に方で羨ましいということでした。あれほど壮絶な死を遂げた祖父の後に声も立てずに亡くなった祖母によかったねと [言いました]。

小さな従弟たちが痛いよ痛いよ、でもどこが痛いかわからないと言っていました。でもこんな状態だから、もうとにかく逃げろ逃げろの一点張りです。1人で逃げるのは嫌だ、もう家族と一緒にいるという気持ちでした。考える力がない中、言葉に押されて逃げ場所がないのに飛び出しました。ちょっと残ったススキ、ちょっと飛び出した岩影に身を隠しました。死体がいっぱい転がっており、動いている人間は全くいません。生きてる人を探しました。長い1日だと思いました。

日が暮れてあのグラマンが消える頃、遠くに人影を見ました。生きてる人がいました。もう一目散に走りまわりました。その辺に転がっている破片を蹴飛ばしたらすぐに

怪我をしてしまいます。小さな怪我でもすぐに傷が腐って不衛生になります。何か月間も風呂に入れず、着替えもなく、垢だらけです。だからすぐに腐ってすぐに蛆が湧きます。絶対に中途半端な怪我はできません。転がっている骨だけの死体、真っ白になるほど蛆がたかっている死体、中でも忘れることのできない死体というのは皮膚が真っ黒に変色して膨れあがっていました。黒い人形のゴム風船が膨れて転がっていると考えてください。なぜそうなるか分かりませんが、とにかくそういうものを避けながら、軍属の男の人と女の人と私と同年代の女の子と行動を共にすることになりました。

どうもみんな他人同士のような感じです。挨拶もせず名乗りもせず、ただ寄り添って仲間にしてもらいました。昼間は物影、木の根っこでも岩陰でもいいからとにかくじっとしてないとなあグラマンに見つかります。日暮れたらすぐに安全な隠れ場がないかと壕探しに奔走します。岩陰に入って腰を下ろしたら、死臭がすることがあります。この人間の死臭というのは今時の皆さんにはとても想像ができないと思います。どれほどいい隠れ場だと思ってもそこにとどまることはできません。別の壕を探して動くということの繰り返しは夜の行動です。何日間も食べなかつたと思っています。

一緒になった軍属は、民間人が軍に所属して軍人のお手伝いをしていただけですが、手榴弾を持っていました。それを1個ずつもらいました。敵を見つけたら投げつけてやっつけるというのが本来の手榴弾の使用方法ですが、この手榴弾は自分のためです。敵に見つかったら捕らえられたら、死ぬよりも大変なことになるから、捕まえられると思ったらこれで死にましよう、ということです。自分にとっての宝物だと思い、大事に救急袋に入れました。捕らえられたら生きてきたまま両足を持って八つ割きにされる、生きてきたまま戦車で轢き殺される、そのように私たちは思い込んでいました。これが敵に対する私たちの思いです。だから絶対に捕まるわけにはいかない。そのようにして何日間、彼らと行動を共にしたかは分かりません。

沖縄戦の終結～命あればこそ

話をちょっと戻しますが、この写真は首里城です。戦争で生き残った命が作り上げた首里城です。これほどの崩壊した中から、残った命がこのようなものを作り上げました。人間の生きて証し、生きて力です。学生さんに話をするとき、人間が生きてさえいればこんなことができる、それだけの命の力があるのだと話しています。絶望で終わるのではなく、命はこれだけのものを作り上げることができるのだから、どんなことがあっても命だけは守るよというのを必ず加えて話しています。

ここが摩文仁ヶ丘という沖縄戦の集結の場所です。そ



してこの丘の突端、ここが総司令官牛島中将が自決をされた丘です。土肌がむき出しになっているところが、今、24万何千人という命の刻銘をされている礎がある平和公園のできている場所です。この丘が、今も昔もこのように青青と樹木が繁る丘なのです。でも砲弾が撃ち尽くされ、樹木がこれほどはぎ取られる状態になるということから砲弾の数のすごさを想像することができます。これが今の姿です。今も昔もこんなに樹木が繁っているところが、あの戦争の終結の頃このようになっていました。今この丘には各県の多くの慰霊碑が建立され、土肌は全部このように綺麗に公園化され平和公園となっています。このようにして命さえあれば、そして時間が経てば樹木も蘇ります。それで木々も蘇りビルも街も出来上がります。でも失われた命は戻ってきません。戦争だけではなく、病気、事故、事件、色々な命を失うことはあります。でも、子供たちには、どのようなことがあっても、なんとしても命を守るようにと常々話しています。

ある日の真っ昼間、私はこの見知らぬ者同士で、木の影だったか岩影だったかわかりませんが、とにかくじっとして、気がついたのです。真っ昼間ですから、あの恐い恐い低空飛行するグラマンが飛び交っているはずなのですが、気が付いたら飛んでいません。飛んでないようね、って目で会話していました。気が付いたら自分の身边に砲弾も落ちていません。砲弾の音は聞こえますが、それは全部遠くで炸裂しています。上空で大型の敵機が飛んでいます、あの低空飛行するグラマンは飛んでいません。私たちにとってほっとするひとときでしたが、不気味です。安堵と不気味が同居している中で、軍属のおじさんがじっとしておれず腹這いになって丘の上に上がっていきました。頂上へ着くやいなや、「おい戦争終わってるぞ」。

びっくりしました。その頃は、戦争が終わって欲しいとか、戦争に終わりがあるとか全く考える力もありませんでした。夢遊病者のように夜は歩き回り昼はじっとしている、その繰り返しでした。その中で戦争が終わったと言われ、もらった手榴弾の入ったバッグを振りかざして、わーいわーい勝った勝ったと丘に駆け上がりました。当時の日本国民のほとんどは、戦争が終わる時には日本

が勝って終わって当たり前という意識でした。それまでの戦争でずっと大国と戦ってきた日本です。これほどの死体が投げ出され、これほどの砲弾を浴び、家族が全部やられてもなお、戦争が終わったイコール日本が勝ったという意識だったのです。

頂上へ着いてまず驚きました。丘の峰々からザッザッと一点に人びとの流れが向かっていました。その先は、米軍の白人と黒人の隊列でした。これだけの人が生きていたことに驚きました。沖縄の地下壕、沖縄のガマがこれほどの命を救うことができたのだと後で思いました。ただ、そのガマに入ることができなかった私たちの家族を含む24万何千人のことを考えます。近づいて隊列に入り込み、さすがの私も負けたことを悟りました。そのようにして集められ、DDTという強烈な殺虫剤をたっぷりかけられました。今、発売禁止になるほどの猛毒です。何か月間も汗をかき、垢だらけで、風呂にも入れず、着替えもありませんでした。ノミはあまり湧かなかったけどシラミが湧かなかったという人は絶対にいません。デブデブと太った白いシラミが体中に服中についていました。これを徹底的に消毒して次の収容所へ移されました。

このように軍民入り乱れて何10万という命を失った沖縄と、一発の原爆で10何万という命を失い、いまだに後遺症に苦しむ広島、長崎とどちらが大変かということを経験することはできないと思います。いずれも愚かな人間が起こした愚かな戦争の出来事です。こんなことに皆さんは出会いたくないでしょう、自分の命がこのように砲弾にさらされていいわけはないでしょう、十代の少年たちが親に遺書を書かなければいけない世の中になってはいけません、と言いたいです。それが、私がこの戦争の足跡を話す理由です。

でも恐ろしい状況が着々と進んでいます。沖縄の南の与那国、石垣、宮古で着々と軍備が進められています。防衛という名の下に標的にされることは必至です。戦争が起こらない状況を作っていくには、若い人たちが本当に本気で自分はこんな目に遭いたくない、戦争はやってはいけないということを自分ごととして考えることが非常に大事なことでないでしょうか。



1945年当時の摩文仁が丘



2018年の摩文仁が丘（平和祈念公園）

トピックス

ギアボックスの破損などが要因で飛行停止 くり返すオスプレイ

2024年11月20日、米ニューメキシコ州のキャノン空軍基地において米空軍CV-22オスプレイがエンジン故障し墜落寸前の事態を引き起こし、予防着陸を行った。これを受け、米海軍航空システム司令部は、12月6日、全軍に対し飛行の一時的な見合わせを勧告した。初期の調査からエンジンからの動力をプロペラに伝える「プロップローター・ギアボックス」(以下PRGB)内での金属疲労が絡む不具合が原因であるとみられる。この問題は、2023年11月29日、屋久島沖で墜落したCV22の事故原因とも類似点があったとされる。屋久島事故の調査報告書(2024年8月1日)によれば、PRGB内で金属片が発生し、その後1時間弱の間にPRGBが破損し、墜落事故となったことがわかっている。

この措置は、一律に運用停止を指示するものではなく、各軍ごとの判断でそれぞれ対応が行なわれた。空軍は12月6日、海軍は12月9日から安全上の問題を軽減する方法を検討するため無期限で自主的に運用を一時停

止した。海兵隊は12月6日から運用を一時停止したが、12月11日には飛行を再開した。陸上自衛隊も、米側の動きに沿って12月10日から飛行を見合わせた。

12月20日、米海軍航空システム司令部は、一時停止していたオスプレイについて、PRGBを検査したうえで、条件を満たした機体は追加の安全対策を施した上で飛行を再開すると発表し、これをもって飛行停止措置は解除された。これを受け、陸上自衛隊も、12月27日以降、飛行を再開させた。

しかし、屋久島事故調査報告書には、「ギアボックス内部では、ギアが高速回転しているため様々な部品が摩耗し、金属片が発生する」と書かれており、飛行すれば必ずついて回る問題が残っていることに変わりはない。配備から17年強たつにもかかわらず、オスプレイは、安全上の問題が減るどころか、むしろPRGBの破損など重要な部品の安全性をめぐる飛行停止が繰り返されている状況が浮かび上がっている。(湯浅)

朝鮮労働党総会拡大会議—北朝鮮の情勢認識と外交・安全保障政策

朝鮮労働党中央委員会第8期第11回総会拡大会議が、2024年12月23日から27日にかけて朝鮮労働党中央委員会本部で行われた。会議には党中央委員会の委員および委員候補が参加し、2024年度の政策実行状況の総括、2025年度の闘争方針、地方発展政策、教育政策などについて議論が交わされた。総会は上程された議案をすべて採択した。

朝鮮中央通信が報じた総会の記事は、地方発展政策、教育政策といった内政問題に多くの紙面を割いており、外交・安全保障問題への言及はわずかである。目下、金正恩政権の主な関心は内政問題にあるようだ。一方で、金正恩総書記は総会演説で、2024年は朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)の国際的地位が向上し、覇権勢力圏の立場が急激に弱まった年だったとの認識を示した。前者は北朝鮮兵のロシア派遣などにより以前と比較してロシアから厚遇される立場になったとの認識を、後者は米国とその同盟国の立場が相対的に弱くなったとの

認識を示したものと思われる。しかし一方で、米国の反共産主義は不動の国是であり、日米韓の侵略的核同盟は強化され、韓国は米国の反共前線基地となっていると述べ、北朝鮮周辺の安全保障環境は依然として厳しいという認識を示した。そうした状況に対処し、北朝鮮の国益と安全を確保するため、北朝鮮は「最強硬対米対応戦略」をとるとともに、ロシアなど友好的な国々との関係発展は積極的に図るとした。

「最強硬」という言葉は強烈であるものの、上述のとおり、金正恩政権の主な関心は外交ではなく内政問題にあると考えてよい。北朝鮮は内政問題に腰を据えて取り組むのに必要な安定的な国際環境を欲している可能性が高く、ここに平和への一筋の光が見える。日米韓は、北朝鮮を挑発するような行動を控え、対話の機運を醸成し、朝鮮半島の安定した平和実現に向けて一歩でも前進させるよう手を尽くすべきである。(渡辺)

長射程ミサイル、25年度からいよいよ配備開始

射程距離が1000kmを超えるミサイル(以下、長射程ミサイルと略す)が、25年度から配備されようとしている。一つは三菱重工が開発・製造して来た「12式地対艦誘導弾の能力向上型」。「地対艦」とは、地上に配備して洋上の相手国の軍艦を攻撃するミサイルである。現在は「12式地対艦誘導弾」(射程距離約200km)が、熊本の健軍駐屯地、鹿児島島の奄美駐屯地、沖縄の勝連分屯地、宮古駐屯地、石垣駐屯地に配備されている。さらに、25年3月には大分県の湯布院駐屯地にも配備されようとしている。日本に侵攻する軍艦を攻撃すると防衛省は言うが、これらの地域に長射程ミサイルを配備すれば、中国大陸のかんりの部分を射程に収めることになる。

12月6日、防衛省は「航空装備研究所新島支所」で10月から11月にかけて12式地対艦誘導弾能力向上型の発射試験を行ったことを明らかにした。地上発射型4回、艦艇発射型2回である。

11月26日、防衛省と交渉を行い長射程ミサイルの配備先を質したが、「現在検討中」としか答えなかった。「住民説明会を開いて、住民の了解を得ること」も求めたが、「自治体と相談して検討する」という回答しか得られなかった。

もう一つ、米国レイセオン社のトマホーク巡航ミサイル。これは射程距離1600km。23年度予算に2113億

円が計上された。岸田前首相は23年2月27日の衆議院予算委員会で「400発購入する」と明言した。防衛省は「トマホークはイージス艦に搭載する、それを超える分は火薬庫に保管」としてきたが、25年度防衛予算には「トマホーク発射機能の艦艇への付加」費用として18億円が計上されている。工事対象のイージス艦は佐世保配備の「ちょうかい」(1998年就役)と決定された。工事完了は26年3月までの1年を見込んでおり、それまでにトマホークが納入されることになろう。12月10日の記者会見で、火薬庫の増設が計画され、海上自衛隊も使用するとされている京都の陸自祝園分屯地の火薬庫に保管されるかを問われて、防衛省報道官は、「現時点で、具体的にどの火薬庫にトマホークを保管するか決定しているわけではございません」と答えている。

12式とトマホークで終わりではない。25年度防衛予算には極超音速誘導弾の製造態勢の拡充に2391億円、マッハ5以上の速度で飛翔するミサイルである。島嶼防衛用高速滑空弾の取得に293億円が計上されている。正確な射程距離は明らかにされていないが、12式を大きく上回る2000～3000kmの射程と報道されている。このまま行けば日本はミサイル大国となり、中国、ロシア、北朝鮮との果てしのない軍拡競争が繰り返されることになろう。そうさせてはならない。(木元)

イスラエルとハマース、ついに停戦合意

1月15日、カタールの首都ドーハで同国と米国、エジプトの仲介の下、間接交渉を続けていたイスラエルとハマースは、停戦合意に至った。合意内容は、昨年5月に発表されたバイデン政権の提案に沿ったものとなっている。1月19日から6週間停戦し、停戦期間中にハマースが女性や高齢者、負傷者を中心とする人質33人を解放し、イスラエが約1000人のパレスチナ人政治犯を釈放し、ガザ地区の人口密集地域から軍を撤退する。また、ガザ南部に避難している住民を北部の家に帰還させ、食料や燃料などの支援物資の搬入を促進させる。

合意されたのは停戦の第1段階で、停戦開始後、16日目までに恒久的な停戦やイスラエル軍の完全撤退を含む「第2段階」に向けた協議を始めるとされている。第2段階では、イスラエル軍がガザから完全撤退して恒久的な停戦に至り、残り的人質もすべて解放される計画だとされる。最後の第3段階で人質の遺体が返還され、ガザの再建に着手することが想定されている。

1月20日のトランプ大統領就任の前の停戦合意を米国がイスラエル・ハマースの双方に強く求めたことで、交渉が進展したとされる。次期中東問題担当特使のステイブ・ウィトコフ氏はドーハでの交渉に参加し、バイデン政権の交渉チームと連携、合意直前の11日にはイスラエルに派遣されネタニヤフ首相と会談していた。その際に強い圧力をかけたことが交渉妥結の決め手となったとも言われている。また、12月8日のシリア政変を受け、仲介国を含めた親米中東諸国首脳が自国への政変の波及を恐れ、地域の安定を強く望んだことも合意の背景にあると考えられる。ネタニヤフ内閣に参加する極右閣僚が停戦合意に強く反対していたが、17日には、閣議で停戦合意が承認された。

15日、ガザの保健当局は、2023年10月7日以降のイスラエルの軍事作戦による死者が4万6707人に上ると発表した。その後も、イスラエル軍の攻撃は続いており、事態は予断を許さない。(役重)

全体を生きる

梅林宏道

(題字は筆者)

第53回 反トマ運動の始まり(2)内と外への往復運動

全国にある自立的な市民運動が、核巡航ミサイル・トマホークの配備に反対するという共通のスローガンでつながる以前に、各地での反トマホークの運動はすでに始まっていた。背景には、ヨーロッパ反核運動の影響を受けた世論の高まりがあった。

巡航ミサイル・トマホークを搭載した米艦船の寄港地として、もっとも懸念されるのは米海軍基地の横須賀と佐世保であった。とりわけ、横須賀基地はすでに空母とその随伴艦の母港になっており、トマホーク艦寄港の中心的基地になる可能性があった。その意味で、横須賀地元の反基地グループとの連携が反トマ運動にとって不可欠であった。

前回に書いたように日本のメディアには1981年11月末に米海軍巡航ミサイルの太平洋配備に関する報道が登場していた。また、1983年2月、核巡航ミサイルの太平洋配備は1984年6月に始まるという報道があった。

横須賀ではいち早く新しい動きが始まった。空母ミッドウェーの横須賀母港(1973年)に反対して誕生していたヨコスカ市民グループは、地元の市民運動、労働運動と糾合し、4団体連名で1982年8月、「非核市民宣言・ヨコスカ——軍都宿命論からの解放のために——」という宣言草案を発表し、非核市民宣言運動・ヨコスカを立ち上げた。宣言文は巡航ミサイル・トマホーク配備の問題を正面からとらえて、次のように書いている。

「…この町が核基地になることを、私たちは望まない。この町が再び日本の侵略の出撃地となることを、私たちはけっして望まない。…」

ここで私たちはひとつの確認をしたい。この町の主人公は私たち市民であるということ。…そうだからこそ私たちは、この町で何がおこり、何がおころうとしているのかを、自らの生き方とかさね合わせて考えたい。

…ミッドウェイのヨコスカ母港から10年目に、巡航核ミサイル・トマホークの極東配備がはじまる。…アメリカ(と日本政府)は、1983年、

トマホークによって、公然とした日本への核持ち込み—実戦配備を行おうとしている。…

トマホークがヨコスカにいつ持ち込まれるかは、もちろん重要なことだが、問題の核心は、核の公然化に日本政府がふみきる政治状況の中にこそある。…」

少し長く引用したのは、ここには日常の暮らしの場から大きな政治を変えるという考えが表れていることを示したいからである。この感覚は、私自身を含む日本の多くの地域に根差した市民運動に共通したものであった。自分自身の生き方を問う、内に向かう思考を含んでいた。

一方で、ヨーロッパ反核運動の波は、市民運動が大きな政治を変える力であることを示しており、日本の運動に対して希望と同時に運動の在り方への変化の必要性を突き付けていた。

私も参加した反トマホークの最初の街頭行動は、1983年8月の横須賀における戦艦ニュージャージー寄港反対デモ(結果的に、このときには戦艦は米軍の都合で日本に寄港しなかった)であった。

当時、私たちはデモや集会に新しい工夫を凝らしたいと真剣に考えていた。横須賀の人たちが実物大のトマホーク模型を作ったのもそのような工夫の一つであっただろう。さらに画期的であったのは、100メートル縦断幕の登場であった。通常の2.5メートル横断幕を40枚つなぎ合わせて縦断幕として、歩道を行く人々にメッセージを読ませた。そして縦断幕によって米軍基地ゲートの封鎖を狙う趣向でもあった。

そのような努力にもかかわらず、私たちは集会冒頭に厳しい批判を受けることになった。集会には、ヨーロッパ反核運動の象徴であった英グリナム・コモンの女性キャンプからレベッカ・ジョンソンさんが招待され発言した。ほぼ1000人が集まった集会であったが、彼女は私たちの微力を率直にかつ厳しく指摘した。参加者の一人が後の報告文に「レベッカさんは強烈な先制パンチ」を与えたと述べて、彼女の発言内容を次のように要約した。「(核ミサイルの)

極東配備というのにこれしか集まらないとは！参加しない人が悪いのではなく、集められない運動が問題だ。」政治の決定を変える外に向かう力が不足していることが指摘されたことは明らかであった。

相模原に住みながらも、日韓連帯運動、時局協商懇談会と東京での活動が増えていた私は、首都圏での反トマホーク運動を担う役回りになった。1983年11月のレーガン米大統領の訪日・訪韓に合わせて、東京での行動が計画された。私が代表を務めていた「日韓民衆の連帯をつくる行動連絡会」も呼びかけ団体の1つとなって、「レーガンもトマホークも来るな！秋季行動実行委員会」を結成し、11月6日に東京日

比谷野外音楽堂で集会・デモを開催することになった。

このときにも集会に新しい工夫を凝らした。結果の成否には疑問が残るが、アイデア自身は今でも使える好いものであったと自負している。それは、舞台に飾る大きい闘争の絵をかなり事前に完成させ、それを5000ほどの長方形のピースに切断して集会の参加チケットにするアイデアであった。チケットには絵のどの部分になるかを示す番地が振ってあり、参加者がそのチケットで入場して舞台上に置かれた大キャンバスのその番地に貼って初めて闘争の絵が完成するという仕組みである。「一人は万人のために」の発想であった。

うめばやしひろみち

1937年、兵庫県洲本市生まれ。ピースデポ特別顧問。長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)初代センター長(2012~15年)。



平和を考えるための 映画ガイド

◆映画『ニュー・シネマ・パラダイス』

「トト」が得たもの、失ったもの——『ニュー・シネマ・パラダイス』

第二次大戦後のシチリア島を舞台に初老の映写技師アルフレードと少年「トト」の年齢を超えた友情を描いた本作は、たぶんほとんどの方がご存知だと思います。

本作の後半に、大人になった「トト」、のちに映画監督として成功を収めるサルヴァトーレ青年に対し年老いたアルフレードが村を出て行け、ローマへ戻れ、と叱咤激励する場面がある。その際、アルフレードが発するセリフがずっと不思議だった。今でも半ば納得がいかない。「ここは邪悪の地だ」。そしてこんなふうが続く。「ここにいると自分が世界の中心だと感じる。何もかも不変だと感じる」。

だが、それはまぼろしに過ぎない、と言うのである。ここでアルフレードはただ自分の村をけなしている訳ではなくて、サルヴァトーレの中に何か輝かしい成功の予感を見だし、それに掉さそうとしている。だが、「トト」にすればその言葉をそのまま信じて旅立ったに違いない。サルヴァトーレはアルフレードに言われた通りに、以来アルフレード死去の知らせが届くまで三十年の間母も妹もいる故郷に帰らなかった。ローマからは「飛行機でたった一時間」だというのに。

アルフレードのその助言あったればこそ「トト」は映画監督としての栄光を掴んだ。ただ繰り返しこの映画を観るとなおさら、立身出世を遂げたサルヴァトーレが冒頭の登場シーンからずっと、快活だった若き日の面影もないほど浮かない顔をしていることが気になってくる。

アルフレードとの交友によって「トト」が得たものもあり、それと同時に失ったものもあった。たぶんそういうことなのだろう。本作の完全版にはさらに「トト」をローマにいかせるため、彼が駆け落ちを心に決めていた恋人との仲をアルフレードが裂いてしまっていたことが後に分かる、というエピソードが加わっている。中年となった「トト」がアルフレードに対して抱く感情は様々な思いの入り混じった複雑なものだったに違いない。もし将来の満たされない生活を初めから知っていたら、彼はもしかしたら彼にとっての「世界の中心」に留まっていたかも知れない。だがたぶん、それでもなお、彼には広い世界の中に果たすべき役目があったのだろう。(うろこ)

『ニュー・シネマ・パラダイス』
監督：ジュゼッペ・トルナトーレ
1989年／伊・仏／124分

日誌

2024.11.16~2025.1.15

作成: 前川大、役重善洋、山田春音
湯浅一郎、渡辺洋介

【核兵器・軍縮】

- 11月16日 印国防省、長距離極超音速ミサイルの発射実験に初成功と発表。
- 11月18日 露大統領府、米供給のミサイルで露領が攻撃されれば、米による攻撃とみなすとする声明を発表。
- 11月18日 NPT準備委員会議長、来日し被団協のメンバーらと意見交換。
- 11月19日 露大統領、新たな核兵器使用ドクトリンを承認。(本号参照)
- 11月19日 ウクライナ軍、米製ミサイルATACMSでロシア領内を初攻撃。
- 11月19日 欧州6か国外相会合で国防費増額、ウクライナ支援強化を確認。
- 11月20日 ウクライナ軍、初めて英供与のミサイルでロシア領を攻撃。
- 11月20日 ASEAN、国防相会議で2025年に米国と海上合同訓練を実施することを決定。
- 11月21日 露大統領、ウクライナで「新たな中距離弾道ミサイル」を使用したと述べる。
- 11月21日 露外務省報道官、ポーランド北部で13日に稼働を開始した米軍の新たな弾道ミサイル防衛基地について、核の危険性を高めると非難。
- 11月23日 仏外相、ウクライナが仏供給の長距離ミサイルを露領へ撃ちこむことを認めると述べる。
- 12月1日 ウクライナ大統領、露との停戦交渉の前には、NATOからの安全保障の確約とさらなる武器が必要と主張。
- 12月3日 国連総会、宇宙空間における大量破壊兵器に関する決議案を採択。
- 12月10日 日本被団協、オスロにてノーベル平和賞を授賞。
- 12月10日 石破首相、TPNWへの署名・批准は「極めて困難」と明言。
- 12月10日 台湾国防省、中国が過去30年近くで最大規模の海軍艦隊を周辺海域に配備しているとの認識を示す。
- 12月16日 米が売却した主力戦車「エイブラムス」が初めて台湾に到着。
- 12月18日 米国防総省、中国軍事報告書を公表。(本号参照)
- 12月20日 長崎県議会、政府に対しTPNWへの署名・批准および締約国会議へのオブザーバー参加を求める意見書案を全会一致で可決。
- 1月8日 被団協、石破首相と面会、核禁条約会議オブザーバー参加求める。
- 1月13日 NATO事務総長、NATOの目標達成には加盟各国が最大でGDP3.7%の国防費が必要と述べる。
- 1月14日 NATO事務総長、NATOがバルト海の監視強化作戦開始と発表。

【日米安保・憲法】

- 11月17日 日米豪防衛相、安全保障協力を巡る新たな協議体の設置や共同訓練の拡大で合意。
- 11月18日 米軍岩国基地にCMV-22 オスプレイとF-35Cが到着。
- 11月22日 米空母「ジョージ・ワシントン」が横須賀基地に再配備。
- 11月23日 海自、マレーシア海軍とマラッカ海峡等で共同訓練(～25日)。
- 11月24日 「自衛隊明記の憲法改正を求める国民集会」、東京で開催。
- 11月25日 日伊防衛相、両国間の物品役務相互提供協定に署名。
- 11月26日 日中佐官級交流事業(～12月4日)。自衛隊代表団が北京、天津、広州の人民解放軍施設などを見学。
- 11月26日 防衛省、レバノンに滞在する日本人などの国外退避に備えて、周辺国に待機させていた自衛隊機2機を日本に戻すことを決定。
- 11月29日 石破首相、所信表明演説で在日米軍基地の自衛隊との共同使用を推進する方針を表明。
- 12月4日 横田基地に在日米軍宇宙軍が発足。
- 12月4日 空自、米空軍とパラオやミクロネシア連邦等で人道支援・災害救援共同訓練(～17日)。
- 12月5日 高松高裁、安保関連法は憲法9条に違反する等として国に賠償を求めた集団訴訟の裁判で、1審に続き憲法判断をせず原告の訴えを棄却。
- 12月6日 日米豪共同指揮所演習『ヤマサクラ87』を健軍駐屯地と朝霞駐屯地で実施。豪が初参加(～14日)。
- 12月6日 海自、米比海軍と南シナ海で共同訓練。
- 12月10日 日米比高官、初めて3か国海洋協議を開催。
- 12月10日 海自、米海軍とグアム周辺海域でミサイル防衛の共同訓練。
- 12月16日 空自、米空軍と日本海及び東シナ海から沖縄県南東方で共同訓練。米戦略爆撃機B-52Hも参加。
- 12月19日 立民・枝野幸男氏が会長に就任後の衆院憲法審査会が初討議。
- 12月20日 防衛省、環境省や東京都などとともに「PFOS」流出問題で米軍横田基地に立ち入り現場を確認。
- 12月22日 「ピースかながわ」等163団体、「戦争しない」と決めた憲法を、活かそう」集会を横浜で開催。
- 12月24日 福岡県芦屋町、空自芦屋基地から暫定目標値の30倍の「PFAS」検出と町のホームページで公表。
- 12月27日 日米両政府、「拡大抑止に関するガイドライン」を作成と発表。
- 12月27日 海自、「海上自衛隊基本ドクトリン」を公開。
- 1月13日 日米比首脳会談、オンラインで開催。海洋安保や経済安保等で協力を継続していくことで一致。
- 1月15日 陸自と英陸軍の共同訓練「ヴィジラント・アイルズ」を大分県日出生台演習場で実施(～26日)。

【沖縄】

- 11月18日 国連の特別報告者、沖縄の現状を視察。PFASと米軍基地との因果関係などを3日間に渡り調査。
- 11月20日 沖縄防衛局、辺野古新基地埋立て工事で、うるま市の宮城島から石材などの搬出開始。
- 11月22日 宜野湾市等5市町村、米軍基地返還予定地の埋蔵文化財の保護や調査での連携を盛り込んだ協定締結。
- 12月2日 辺野古新基地埋立て、ダンプカーの死傷事故で中止していた本部港塩川地区からの土砂搬出を再開。
- 12月2日 与那国島での墜落事故の後、那覇空港に駐機していた陸自オスプレイが木更津に向けて離陸。事故機は、海上輸送へ。
- 12月6日 米海兵隊普天間基地のオスプレイの飛行を一時停止。11日には飛行を再開。(本号参照)
- 12月13日 那覇地裁、米空軍兵に懲役5年の実刑判決。少女への性的暴行などの罪で。
- 12月14日 米海兵隊、沖縄駐留の約100人がグアムへ移転開始と発表。
- 12月18日 米軍、沖縄県などが中止求める中で、嘉手納基地でパラシュート降下訓練を強行実施。
- 12月22日 米兵の性暴力事件を受け、女性団体などが沖縄市で大規模な抗議集会。2500人が参加。
- 12月28日 沖縄防衛局、辺野古新基地埋立てで軟弱地盤の強化に向け敷砂作業を始め、地盤改良工事に着手。
- 1月8日 沖縄県警、在沖米海兵隊員を成人女性への不同意性交などの致傷容疑で書類送検。
- 1月10日 辺野古大浦湾側の工事、着工1年。沖縄県は工事に反対し、市民は海上からカヌー20隻などで抗議活動。

【朝鮮半島】

- 11月20日 韓国の国家情報院、北朝鮮兵がロシアの部隊に配属され一部は戦闘に参加したと見方を示す。
- 11月21日 金正恩総書記、演説で、米国にあるのは「共存の意思」ではなく、「いつまでも変わらぬ侵略的で敵対的な対北朝鮮政策」だと述べる。

今号の略語

ASEAN: 東南アジア諸国連合
EU=欧州連合
IAEA=国際原子力機関
ICBM=大陸間弾道ミサイル
IRBM=中距離弾道ミサイル
JCPOA=共同包括的行動計画
NATO=北大西洋条約機構
NPT=核拡散防止条約
PFAS=有機フッ素化合物
START=戦略兵器削減条約
TPNW=核兵器禁止条約
UNRWA=国連パレスチナ難民救済事業機関
安保理=国連安全保障理事会
被団協=日本原水爆被害者団体協議会

ピースデポの出版物

『ピース・アルマナック2024』

B5判、260ページ、6月30日刊行
編著：ピース・アルマナック刊行委員会
監修：梅林宏道
出版社：緑風出版

ハイライトーガザ危機
★パレスチナ年表／被害統計／ハマスとイスラエルの10・7声明／国連緊急決議／ジェノサイド提訴／中東研究者の停戦アピール
★巻頭エッセイ 清木愛紗：求められる憲法24条からの学びと実行 パレスチナを視野に
★注目資料
核禁条約締約国会議政治宣言／米未臨界核実験全リスト／国連・平和のための新アジェンダ／ロシア新START履行停止宣言／米韓・日米韓軍事演習リスト／キャンプ・デービッド首脳声明／プーチンへのICC逮捕状
★2023年解題：中村桂子／渡辺洋介／前川大／役重善洋／榎本珠良／河合公明／木元茂夫

定価2900円(送料別)



●ピースデポ入会の案内

会員、賛助会員、年間購読者には、『脱軍備・平和レポート』(年6回)と『ピースデポ会報』(年2回)に加え、資料年鑑『ピース・アルマナック』をお届けします。

詳細や入会の申し込みはピースデポHPをご覧ください。

右のQRコードを読み込んでいただくとホームページの入会申し込み画面に移動できます。



●お知らせ

旧年版「ピース・アルマナック」の有用資料がHPで読めます！

たとえばトランプ政権の「核態勢見直し」文書、毎年国連総会の日本決議など、過去に発行された「ピース・アルマナック」のデータ、演説、声明などのうち、重要なもので、かつ最新の「ピース・アルマナック」に掲載されなくなったものをピースデポのホームページ(HP)で公開しました。ご覧になりたい方は、HPの「定期刊行物>ピース・アルマナック>ピース・アルマナックバックナンバー」をクリックし、ご覧になりたい文書をお探しください。

●遺贈寄付の受付について

遺贈による寄付によって、あなたの核兵器の廃絶を求める意思をピースデポの活動に託しませんか？

どうすれば、思いを形にできるかなどのご相談に応じます。

Eメールまたは電話でピースデポ事務所までご連絡ください。

●寄付のお願い

私たちの調査・研究活動は、平和・軍縮問題に関心を持つ、一人一人の市民によって支えられています。皆さまのご支援をお願いします。

北東アジア非核兵器地帯へ：朝鮮半島非核化合意の公正な履行に関する市民の監視活動

最新号「監視報告 No.37」(7月19日)
NPTと北朝鮮：日韓両政府は、条約会議を非難ではなく問題解決の場として活用すべきである

右のQRコードまたは下記リンクよりご覧ください。
<https://nonukes-northeast-asia-peacedepot.blogspot.com/>
メルマガ無料送付希望の方 office@peacedepot.org まで

非核化合意履行・監視プロジェクト
Citizens' Watch for a Fair Implementation of Korean Peninsula Denuclearization Agreements

『脱軍備・平和レポート』第31号

発行日 2025年2月1日

発行元 NPO 法人ピースデポ

〒222-0032 横浜市港北区大豆戸町1020-5 第4西山ビル304号室

TEL 045-633-1796 FAX 045-633-1797

Eメール office@peacedepot.org

ホームページ <http://www.peacedepot.org>

【郵便振替口座】

口座番号 00250-1-41182

口座名称 特定非営利活動法人ピースデポ

【銀行口座】

横浜銀行 日吉支店

普通 1561710 トクヒ)ピースデポ

編集委員

木元茂夫、役重善洋(編集長)、湯浅一郎、渡辺洋介

次の方々が本号の発行に
参加・協力しました

朝倉真知子、梅林宏道、うろこ、
倉本芽美、塩入雄一郎、清水春乃、
玉木利枝子、徳田悠希、中村和子、前川大、
安田大地、山口大輔、山田春音、山中悦子
※50音順

制作 NPO 法人ピースデポ

印刷 (株)野崎印刷紙器

定価：300円